

脱 却

阪本 怜（さかもと れい）

神戸大学経営学部

2005年の9月、何気なく立ち寄った本屋でなぜか呼ばれているような気がして「プロフェッショナルの条件」を手にとった。これがドラッカーとの出会いだった。この本の「ポスト資本主義社会」からの抜粋の部分に、長い間探していたものを突然見つけたような衝撃をうけた。それは、これまで歩んできたレールを修正するのに十分な衝撃だった。

わたしにとってドラッカーとは洞察である。ドラッカーの洞察は簡潔明瞭で、しかも深い。また、理論的すぎず、かつ実践的すぎず、理論と実践のバランスがほどよいところでとられている。さらに、話の素材がごく平凡であることがその洞察を際立たせている。特殊な研究について書くことで人をうならせることは、簡単ではないものの比較的誰にでもできる。逆に、平凡な素材で人をうならせるものを書くには、著者自身の思想や洞察が抜きん出たものでなくてはならない。ドラッカーの著作に対する賞賛は、ドラッカーが扱っている素材に対する賞賛ではなく、必然的にドラッカーの洞察の鋭さに対する賞賛となる。

ドラッカーには洞察の手本を見せられた気がする。そして、すぐにその虜になった。気がついたときには、ドラッカーの著作との格闘がはじまっていた。

メッセージ

この2年間、ドラッカーの著作から多くのことを学べた。歴史の見方、洞察について、いま起こっていること、マネジメント。それら全てが自分の行動や考えの礎となっている。しかし、ドラッカーから学んだ最も重要なことは、マネジメントなどドラッカーが発見したもの、あるいはドラッカーが考えたものそれ自体ではなかった。

著作を読んでいて感じたのは、ドラッカーは人に考えさせるということだ。ドラッカーの著作は思考を刺激する。そのことから汲み取れたドラッカーのメッセージは「考えよ」ということだった。そして、これがドラッカーから学んだ最も重要なことだ。ドラッカーは考えることが何よりも重要ということを知っていたからこそ、思考を刺激することをひとつの目安として文章を書き、その結果、実際に人の思考を刺激できたのだろう。

模倣の対象

人が成長するためには模倣が欠かせない。まず人のまねをし、そのエッセンスを吸収する必要

がある。何もないところから創造的な仕事はできない。稀代の天才ですら模倣から出発する。アインシュタインは光に乗って運動したらどうなるかをイメージして、引力によって光が曲がるという結論を得た。この「光に乗って運動する」ことをイメージするというやり方は、アインシュタインが独自で生み出したものではなかった。アインシュタインは13歳になる頃、アロン・ベルンシュタインによる物理学を網羅した21巻の大作を読みふけていた。この本のなかに、電気信号に乗って旅をする話がかかれている。アインシュタインはベルンシュタインの発想を模倣したのだ。そして、その模倣が物理学を覆す功績を生んでいった。

模倣の対象が誰か、あるいは何かというのは、人の成長において重要な要素になる。模倣の対象によって、その人の枠組みが決まってしまう可能性すらある。それほどまでに重要であるにもかかわらず、模倣の対象の選択は常に運に大きく左右される。この点でわたしは運が良かった。ドラッカーという模倣の対象としてこの上ない存在に出会えたからだ。

ドラッカーはどう考えているのか、そしてドラッカーならばどう考えるのだろうか。何か物事について考えるとき、このように考えることが役に立った。著作にヒントはないかとドラッカーの意見を探すこともあった。そうするうちに、ドラッカーのスタンスや観点、立ち位置など根本的な思想が理解できるようになった。模倣がうまく機能したとっていいと思う。

しかし、この状態はドラッカーのメッセージをまだ汲み取れていないことを示していた。模倣は考えているとはいわない。

ドラッカーからの脱却

このエッセイを一言で要約するならば、「脱却」あるいは「決別」である。このエッセイはドラッカーからの脱却を確認するために書かれている。しかし、これは悲しい別れではない。むしろ、感謝の別れである。

模倣の行き着く先は、脱却であるべきである。自分というものは自分以上でも自分以下でもない。等身大の自分が最も大きい。しかし、人は等身大の自分を恐れる。そこで、自分を大きく見せようとするも、実際には小さく見せてしまう。あるいは、自分の当たり前の素晴らしさに気づかずに自分を否定し、他人になりきろうとしてしまう。他人になろうとすることほど悲劇的なことはない。なぜなら、そのようなことは不可能だからだ。人は強み、価値観、やり方などに関して、大きく異なるものをそれぞれがもっている。他人に倣うことは欠くことのできない過程である。しかし、模倣はいつか脱却しなければ、個人の良さを潰す害にしかならない。目的は模倣ではない。その先の成果が目的でなければならない。

ドラッカーから吸収し自分のものとして利用すべきものは、ドラッカーが明らかにしてくれた基本と原則であって、ドラッカーの解釈や意見ではない。ドラッカーの解釈や意見は参考資料であって、あらゆる人がもつべきものの見方ではない。ドラッカーの解釈や意見をそのまま取り込むことは、ドラッカーに考えてもらっているだけで、自分で考えていることにはならない。すなわち、ドラッカーを妄信することは、ドラッカーの「考えよ」というメッセージを無視していることを意味する。逆に、このメッセージを真摯に受け止めたとき、ドラッカーに考えてもらおうと

いう選択肢は消え、自分で考えるという選択をしなければならなくなる。そして、ドラッカーからの脱却がはじまる。

考える

実際に考える人はそれほど多くはない。考える技術の有無が考えることを難しくしている。しかしそれ以上に、考えようと決心できないことが考えることを難しくしている。考えることは面倒であるし、考えなくても生きていける。事実、考えるくらいなら死を選ぶ人は多い。

また、「考える」を勘違いしてしまうこともある。

本を多く読むことが知性の証という信仰がある。速読をできる者が賞賛され、読書術の本が本屋に平積みされ、読書の冊数その人の知性を測るバロメーターとなっている。時間不足という意識と知識の必要性がその傾向に拍車をかけている。

本を多く読む人は、様々な問題に関して著者の言葉を使って、よりの確な意見をたやすく述べられる。だが、そこには自分というものがいない。その意見には自分の考えというものが欠けてしまっている。著者が考えたのであって、自分で考えたわけではないにもかかわらず、著者の言葉を自分の言葉と勘違いしてしまう。そして、著者の言葉を集めることが考えることであるという思い違いをしてしまう。そうやって著者の言葉に頼っているうちに、自分で考える力を失い、自分すら見失ってしまう。饒舌な口から出てくる言葉は、どこか浮ついた、自分に立脚していないわ言だらけになる。

これは他人にもすぐに伝わる。自分の考えでないものには、迫力も影響力も現れてこないからだ。他人の考えを流暢に話しても、人の心を動かすことはできない。逆に、自分の考えには迫力と影響力がある。自分の考えとは自分にとっての真実である。真実であるという揺ぎ無い確信をもっているとき、その言葉には迫力が備わる。

考える決心と技術をもっていたとしても、考える対象を何にするかでその結果は大きく変わってしまう。真に対象とすべきは著者でも著者の言葉でもない。それらは自分で考えた上での参考資料であったほうがいい。それでは何を考える対象とすべきか。

現実にかかわる

ドラッカーはこのことについてヒントを与えてくれている。エリザベス・ハース・イーダスハイム著「P・F・ドラッカー」の謝辞にドラッカーの言葉が書かれている。その言葉とは、「現実にかたわいなさい」というものだ。

われわれは現実を忘れてしまいがちだ。ニュースを聞き、新聞を読み、最新のベストセラーを読むことで、現実を知ったと思い込んでいる。それらは誰かの解釈であって、質感のある本物の現実ではないことを簡単に忘れてしまう。ひどい時には、誰かの解釈の解釈を現実と思い込む。伝言ゲームの最後尾にいるにもかかわらず、自分の得た情報が真実だと叫んでしまう。しかも、その滑稽さになかなか気づけない。

考える対象として、現実ほど適切な対象はない。現実とは、より真実に近い情報のことである。

たとえば、現場や一次資料のことである。それらを考える対象とすることで、現実世界に即した洞察を生み出すことができる。実践的で役に立つ考えをもつことができる。これとは対照的に、解釈の連鎖に即した洞察は、非現実的なものとなる。それは現実世界を混乱させるだけで、あまり役に立たない。素晴らしいノウハウのはずが、誰にも実践できない理想論になってしまっているようなきまりの悪さがそこにはある。

現実こだわると、現実ではないものは全て補助教材になる。ドラッカーの著作ですら参考資料でしかなくなる。わざわざ書の中に現実を探す必要はない。目の前には現実が広がっている。ドラッカーの著作は羅針盤となりうるが、精密な地図の役割は果たせないし、そのような役割を果たす必要もない。

思想を受け継ぐ

現実を見て考えるとは、現実の成果を重視する手段である。また同時に、思想を正しく理解し受け継ぐための手段でもある。

偉大な著者に対してわたしたちが犯してしまいがちな反応は、著者の考えを研究し、著者の考えの後追いに終始してしまうというものである。そのような姿勢は著者の思想にこだわり、現実を見ないということにつながりかねない。そうして、偉大な思想家の熱烈な信奉者が、その思想をゆがめる原因となってしまうことがある。ドラッカーを尊敬するひとりとして、それは避けたい。現実を見る、そして考えるとは、そのための処方箋でもある。

【筆者プロフィール】

阪本 怜 25歳 兵庫県神戸市在住
1982年5月4日生まれ
2001年4月 大阪大学薬学部 入学
2005年3月 同 卒業
2005年4月 大阪大学大学院薬学研究科 入学
2007年3月 同 修了
2007年4月 神戸大学経営学部3年次編入